

四旬節第2主日

ルカ 9・28b-36

2019. 3. 17

高円寺教会 9:30 ミサ

聖パウロ修道会 澤田 豊成神父

同じ聖パウロ修道会ですが、わたくしは待降節に来られた吉田神父さんと違って話が長いのでよく知られています。すみません。長い話が嫌いな方には、あらかじめ謝っておきたいと思います。

今日は、四旬節第2主日ですね。四旬節は、特に第1主日と第2主日はテーマが決まっています。第1主日は先週読まれたとおり、四旬節の意味合いを表すため、40日間のイエスの荒れ野での生活が朗読されます。第2主日はいわゆる主の変容と言われる、イエスが目に見える形で栄光をお現しになったエピソードが朗読されます。なんででしょうかね。皆さん考えたことありますか？ 四旬節ですよ。回心、断食、犠牲、赦し、こういったことがテーマとなる季節なのに、なんでこんな華々しい栄光あふれるイエスの姿が、毎年毎年第2主日に朗読されるのでしょうか。

これ、わたしたちに対する問いかけだと思うんです。8月6日にわたしたち主の変容の祝日を祝うんですよ。そのときにもおんなじ箇所が読まれます。ですが、今日は四旬節です。「四旬節の意味合いの中でこの箇所を読み深めてくださいね」、そんなこと言われたってわかんないよって、皆さん言われるかもしれませんが、でも、ですが、考えてみる必要があるのだと思います。

わたしは子供の頃、と言いますか、志願者、学生だった頃に、よくこんなことを言われたんです。「人間、弱いからねえ。弟子たちも弱いからねえ。だから、これから十字架の歩み、苦しい苦しい歩みをしていく中でへこたれてしまうから、そのとき頑張れるようにって、あらかじめイエス様は栄光の姿を見せてくださったんだよ。頑張ろうね」って言われたわけなんです。子供の時代は、良く分かるなっていう説明だったんですけど、だんだん成長していくと、「え、そんなもんなの？ じゃ、なんで四旬節に読むんだろうか」、そういうふうを感じるわけです。

皆さん、今日の集会祈願でも叙唱でも唱えられることなんですけれど、これ、なんでこんなことが読まれるかって言うと、十字架見てください、皆さん。どう見たって、キラキラ輝いてないでしょう？ この姿に、なんにも知らない人

は栄光なんて見ないですよ。アクセサリーとして最近クロスがよく使われますけどね、十字架が。でもその場合、必ずと言っていいぐらい、このイエス様は取り去られます。そして、十字架を金銀で覆います。イエス様のかわりに宝石が散りばめられるんですね。分かり易いからですよ、皆さん。でも、わたしたちは、この十字架上のイエスに、はたして栄光の輝き、喜び、宝、恵みを見て、追い求めることができるのかどうか。そう、苦しみと喜び、死と復活、十字架と栄光は、神の眼差しの中では分けられない、一つのものなんです。

わたしたちの生活は、感覚的に言えば、決して喜びに満ち溢れたものではないですよ。苦しいですし、痛いですし、辛いですし、大変ですし、生きていくのは本当に骨が折れます。ですが、わたしは思うんです。もしこの世から苦しみがなくなったら、人間は本当の喜びに気づかなくなってしまうだろうなって。再来週、放蕩息子のたとえが読まれますけどね、放蕩息子が父親の家で生活していて感じたのは、「なんでこんな所にいなきゃいけないんだろうか。大変だ。辛い。もう逃げ出したい」。そうやって逃げ出したんですよ、皆さん。そしてひどい目に遭って、苦しみに苦しんで、気付いたんです。「ああ、父親の家にいるって、なんて素晴らしいことだったんだろうか」。わたしたちもおんなじなんです。断食、祈り、ほどこし、犠牲、苦しい生活、大変な生活、その中で初めて気づくことがあるんです。「ああ、人から支えられている。神から支えられている。神の家に集まるってどんなに素晴らしいことだろうか」。それが四旬節なんです。

今日の福音はとっても面白いんですね。弟子たちって、わたしたちと同じ人間なんです。だから、正直なんですね。本人たちは全然意識してないんですよ。「イエスに従っている我々は弟子だ」なんて思ってるんです。ですが、弱さとか、不十分さとか、未熟さなどが、ことばや行動の端々にボロボロ、ボロボロ現れてきます。今日もそうです。栄光のイエスに圧倒されてしまうんですね。

皆さん、まだ寒い時期ですから、白い服の方はほとんどいらっしゃいませんよね。冬はどちらかというと、なるべく太陽の熱を受けようとして、ちょっと暗めの服を着るわけです。日本では白装束なんて言いますから、白い服はあんまり華々しい感じはしないかもしれませんね。特に今では、白はありきたりの色に思えます。たとえば子供に絵を描かせると、白って塗りませんか？ 紙が白だからです。塗らなくなったら白なんですよ。ですけどね、昔は真っ白なものなんて作ることでできなかったんです。だいたい薄汚れてるんですよ。皆さん、たとえば羊なんか思い浮かべるとき、真っ白な羊を大体思い浮かべますでしょう？ 実際の羊を見てください。きれいじゃないです。汚い。汚れてますし、臭いです。すみませんね、イメージを台無しにしてしまうかもしれません

んけれどね。実は、このイエスの時代もそうなんです、旧約の時代から始まって、白って人間が作り出すことができないものだったんです。もともと真っ白なんだったら、絵を描けば色を塗ればいいんですよ。染めればいいんです。色が付いてるものを白くすることって、真っ白にすることって難しいんです。だから昔はできなかったんです。なので、神にしかできないことという意味で、復活、栄光、神の色という意味で、白を用いたんです。白衣（びゃくい）の主日って言いますでしょう？ 洗礼を受けると、白のベールか白衣を受けますでしょう？ それはなぜかって言うと、そういう理由があるんです。司祭の祭服も本当はこの部分真っ白じゃなきゃいけないんですね。復活の色を表すからです。ですが、日本だとやはり白装束になってしまいますから、ちょっと色つけておこうかな、という感じでベージュになったんですけど、白って復活の色、救いの色、栄光の色、永遠の色なんです。だからみんな圧倒されるわけです。復活のときもそうでしょう、皆さん？ 空の墓に現れる天使は白い衣を着ているわけですよ。それは、天からの者だよってということがわかるように、そういう描き方をするわけです。

弟子たちはびっくりするんですね。特にペトロは居ても立ってもいられないんです。そこで何を言うかっていうと、「ここに仮小屋を3つ建てましょう。一つはあなたのため、イエスのため、一つはモーセのため、一つはエリヤのため」。何を言っているのか自分でも分からなかった。つまり、無意識のうちにそう言ってしまった。心の思い、望みが現れてしまったんです。わたしたちもおんなじなんです。素晴らしいことがあると、ああ、これがずっと続いてほしいって思いますでしょう、皆さん？ 喜びがあると、続いてほしいって思いますでしょう？ 楽しいことは続いてほしいんですよ。だけど、続かないですね。苦しいことは続いて欲しくないんです。だけど、なかなか終わってくれないんですよ。それはわたしたちの感覚なんです。実際には、喜びと苦しみをどう感じるかはわたしたちの勝手なんですけども、なぜか知らないけれど喜びというのにわたしたちは飛びつくのだけれど、それはなかなか続いてくれない。仮小屋を建てるってどういうことかって言いますと、要するに、どうせなくなってしまうのが分かっているから、ここに仮小屋を作ってそれを押し止めようっていう思い、それを表してるわけなんです。この栄光が一瞬でも長く続いてほしいんです、弟子たちは。だから、こんなことを言うってしまうんです。すると、結末はどうかという、天からの声が聞こえて、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」。ぱっと見ると、それはもう真っ白な栄光に輝くイエスではなく、わたしたちとおんなじ姿。なんだ、普通の人間じゃない。見分けがつかないよ。そう思えるイエスがそこにおられるだけ。そして、このイエスがこれから十字

架に向かって歩いて行かれるわけです。これこそ救いであり、栄光であり、このイエスに聞きなさい、と。

難しいですね。十字架のイエスを見つめて、目には見えない栄光の輝きをわたしたちは信仰の眼差しでちゃんと見ているのだろうか。ああ、わたしもこうなりたいて思っているのだろうか。皆さん、安心してください。普通の人間はそうは思いません。普通に生活していたら、そんなこと絶対思いませんよ。やっぱり楽をしたいんですよ、わたしたちは。けども、このイエスの生き方に魅力を感じ、喜びを感じ、救いを感じたから、わたしたちはここに集まっているんです。それを思い出すために、教会は四旬節第2主日にこの主の変容の箇所を読むわけです。見えないからこそ、感じられないからこそ、この十字架のイエスに栄光を見つめることができる。

わたしたちは忙しいですね。やらなきゃいけないことがたくさんあります。毎日毎日の事柄に追われています。だから、だんだん、だんだんと世の常識、普通の感覚に染まっていきます。分かっているはずなのに。だから、この四旬節に、立ち止まって、そして、本当に消えることのない大切なものを思い起こすんです。

教皇フランシスコは灰の水曜日にこんなことを言ってますね。「なんでわたしたちが灰を受けるのか。それは、キラキラしているように見え、燃えているように見えても、でも全部灰になっちゃうでしょう、最後は燃え尽きて。分かっているのに、わたしたちはそれを追い求めていて、そして、こうしたことが頭の中にいっぱいあるわけです。喜び、楽しみ、お金、快樂、いろんなことです。でもそれはいずれ燃え尽きて灰になるんです。頭の中にいっぱいあるよってことに気づかせるために灰を受けるんですよ」。教皇フランシスコはこんなことを言ってますね。「けど、燃え尽きない、灰にならないものがある。それを、神は、独り子イエス・キリストを送ってわたしたちに示してくださったのではないか。それが十字架のイエスでしょう」って言われるんですね。「イエスは殺されたはずなんです、十字架に架けられて。なのに、灰にならなかったんですよ。復活なさったんです。だから、この生き方をわたしたちも自分のものとする、それを望むこと、生きようと欲すること、そこに気づきましょうよ」と呼びかけておられました。

わたしたちは、いったい何を求め、何を望んで、毎日を生きているのでしょうか。他の人の生き方は放っておいて良いんです。わたしはどうなんだろうか。それを真剣にこの四旬節に考えてみたいと思います。